

今日の資料サルベージ試行

水俣病関係写真ネガフィルム・データベース化の事例から

香室結美 (熊本大学)

資料の収集・整理・保存・公開は、事実とともに人びとの活動の軌跡を示す「記録」を後世に残す意味で重要である。資料を保存するスペースや関係者の高齢化により、資料の受け取り手がいないという切迫した現実的問題が生じるなか、熊本大学文書館は約 10 万点の水俣病関係資料の受け入れを進めてきた。一方、博物館等が収集したモノを現地に返還する動きが世界的に生じ、元々の現地-収集者-収蔵館-返還の受け取り先等の中でモノの意味付けと取り扱いの問題が複雑に進行しており、誰がどのような資料をどのような形で保存・公開・利活用すべきなのかという問いを、博物館やアーカイブズはこれまで以上に深刻に突きつけられている [cf. クリフォード 2020]。

本発表では、1970 年代の激動の水俣に住み撮影した写真家・塩田武史 (1945~2014) のネガフィルム・データベース化の事例を紹介し、参与し撮影する塩田の撮影スタイルを掘り起こしながら、地域とそこに生きる人びとの記録としてのネガフィルムの可能性と、保存・公開・利活用の課題を示す。水俣の人びとが映された写真資料はどこに、誰に属するべきか、写真の帰るべき場所 (ホーム) とはどこか? さらに問うとすると、写真に付随する、あるいは写真が想起する記憶や経験は誰によっていついかにして呼び戻され、どこに辿り着くのだろうか。資料の収蔵館は、記録を残すことで何を可能にすべきなのか。

1) 写真家・塩田武史の「参与撮影」

本発表では、熊本県水俣市に位置するチッソ株式会社・水俣工場が水俣湾にメチル水銀を含んだ排水を 36 年間流し続けたことに端を発する「水俣病事件」に何らかの形でかかわる写真のことを、水俣病関係写真と呼ぶ。事件発生以来、水俣を撮った写真家は 10 名以上いるが、塩田は 1970 年から 10 年間家族とともに水俣に住み患者とその家族を撮影した点で特徴的である。塩田は単なる被写体というより近所付き合いとしての人間関係を重視し、患者らと共に遊び、食事し、地域社会で暮らすことで、水俣病事件、水俣地域、そして患者とその家族ひとりひとりへの理解を深めた。塩田の撮影スタイルからは、「水俣病」表象にとどまらない人びとの生活者、あるいは人間としての記録が残された。そのような撮影姿勢は、たとえば 1960 年代に事件を社会に知らしめる目的から劇症型患者を含む被写体をときにアイコンニックに撮影した桑原史成や、ユージン・スミスのジャーナリストとしての信念に基づいた仕事とは異なる [cf. Becker 1973]。

キーワード アーカイブズ、写真、歴史、サルベージ人類学、水俣

2) 写真アーカイブズの多義性

メチル水銀中毒の被害や患者の活動を広く訴える必要があった当時、写真集や雑誌、展示では被害をわかりやすく伝える写真が中心に選ばれた。塩田は患者を「患者」として撮り、発表することに悩んだ。ところが、未発表写真を含む塩田のネガを現在見てみると、当時の水俣の年中行事や闘争の合間の人びとの柔らかい表情、何気ない日常生活が見えてくる。人類学のアーカイブズ研究においては、アーカイブズの「制度」としての権威的・植民地的性質が指摘されると同時に、収集・所蔵される写真等のコレクションに内在する転覆的・多義的側面が着目されてきた。コレクションから受け取られる意味は時を経て再編成され続けるのであり、アーカイブ実践は動的な歴史的過程として描かれる [Edwards & Morton (eds) 2016]。塩田の写真は患者の表象に留まっていなかったために、再意味付け・再文脈化の余地を多く残していると考えられる。

3) ネガフィルムのデータベース化とセカンドライフ

2014 年に塩田は亡くなり、発表者は 2020 年から遺族を手伝い、塩田のネガフィルム・データベースの構築作業を行っている。ネガフィルム毎に、年月日、場所、事件との関係、被撮影者名等のキャプションといったメタデータと簡易コンタクトシートを作成している。そして、塩田生存中に公表されなかった大部分の写真—塩田本人の意思か、時代が求めなかったのか—を見直し、水俣現地を再訪し、語り直す作業を行っている。

2021 年 12 月、水俣を撮った写真家と遺族 9 人が、数万点のフィルムのデジタル化を目標とする「水俣・写真家の眼プロジェクト」を立ち上げた。これまで発表されてきた作品としての写真とは異なる、水俣病事件そして水俣地域の「資料」としての写真のセカンドライフが写真家たち本人によって考えられようとしている。地域の財産、事件史の微細な記録、一義的ではない患者と家族の姿など、塩田の写真もその今日的意義が読み直されている。本発表は継続中の作業とそこからの考察および課題の報告になるが、写真の特性を考慮しながら今日における資料サルベージの試みのひとつを示したい。

(参照文献)

クリフォード, J. 2020 『リターンズ』星塾守之訳 みすず書房。

Becker, H. 1974. *Photography and Sociology. Studies in Visual Communication* 1(1): 3-26.

Edwards, E. & C. Morton (eds) 2016. *Photography, Anthropology and History*. Routledge.